

講演

今後の拉致問題の課題

内閣総理大臣補佐官

中山 恭子

皆様、こんにちは。内閣総理大臣補佐官を務めております中山でございます。今日は亜細亜大学法学部の四〇周年記念の式典が行われたと伺っております。そのような記念すべきときにお話しさせていただけますことを、大変光栄に思っております。学生の皆様とお話しできるといふことで、喜んで参りました。このようにたくさんの方々がお集まり下さいます。本当にありがとうございます。このような機会をお与えいただきましたことを、亜細亜大学の小川学長様はじめ関係者の皆様から感謝申し上げます。

今日は「今後の拉致問題の課題」という大変難しいテーマになっていますが、若い方々がたくさんいらっしゃいますので、自分がこれまでに海外とのかかわりの中で経験してきたことや考えたこととお話したいと思えます。若いころ、四〇年くらい前、この法学部が創立されたころにフランスに留学した時のこと、その後ウズベキスタン共和国およびタジキスタン共和国の特命全権大使として、中央アジアで三年間生活した時のこと、そしていまかかっている北朝鮮による日本人拉致問題、この三つのことを、駆け足になるかもしれませんが話しし

たいと思います。学生の皆様が今後社会に出て活躍なさるときに、私の話が何か参考になったらいいなと思っています。

法学部の皆様は、法学部を卒業なされすぐに人々の生活と密接な関係がつけられ、民間企業に入っても、公的機関に勤めても、海外との関係が、仕事場または生活で関係してくると思います。今日お伝えしたいのは、そのときまでに、亜細亜大学での今という時間を大切に使うて自分を磨いてほしいということです。

四〇年ほど前、フランス政府給費留学生としてフランスに渡りました。当時はまだ日本も貧しかったし、家庭も豊かではありませんでした。フランス政府が費用を出してくれる留学生制度があつて、その試験を受けてフランスに渡りました。

フランスに渡つて、パリでの生活で感銘を受けたことがたくさんありました。日本の文化とは全く違う文化がそこにあることを、身をもって知らされました。皆様もいらしたことがあるかもしれませんが、パリは街全体が芸術品のような街です。何度も行ってみたいと思うような街でした。日本の街が成行きにまかせてつくられるのとは違って、街そのものが計画され、しっかりと街区が決められてつくられています。特に女性がとても美しく見える街だと思いました。

七階の上の階、屋根が斜めになっている屋根裏部屋に住んでいましたが、この部屋にも出口の扉の隣の壁に大きな鏡がはめ込まれていました。パリの女性たちは街に出るとき、必ずその鏡に自分を映して、頭のとっぺんから足の先までチェックして出かけていきます。どうしたら自分を美しく見せられるのか、パリジェンヌはいつも考えていて、それが生活の習慣になっています。個人が大切にされている社会がそこにありました。ほかの人と違つていなければいけない、ユニーク、自分一人独特だということに高い価値が置かれていました。

当時の日本は、なるべくほかの人と一緒にがいい——いまでも日本ではそういう文化があるかと思いますが——人並みでいよう、ほかの人と同じ格好をしよう、同じようなものを持っていれば安心していられるという社会でした。話に聞いたり文章を読んだりして、頭では理解していましたが、実際にパリに住み、自分の持っているものすべてを生かして個性を出しなさいとさんざん言われて、文化の違いを思い知らされました。個人を大切にする文化、人間中心の文化がそこにありました。

その文化のすばらしさを学ぶと同時に、パリにいて考えたのは日本の文化です。みんなで分かち合う、慈しみ合う、誰かが困っていればみんなで助け合うという日本の文化は、フランスや西洋文化とは異質だけれども、ここに文化の高さ低さはない。逆に、日本の持っている文化の大切さをしっかりと確信することができました。フランスの人々も日本の文化の話をするときよくわかってくれて、日本の文化を高く評価してくれるという経験をいたしました。

それ以降、自分が日本人であること、日本の文化を身につけた人間であることを臆せずにそのまま打ちだして、海外の人々と接してきました。自分が日本の文化で育った人間だということをはっきり打ちだすことで、相手の外国の人にも安心して付き合ってもらえたと思います。何も西洋的な生活や習慣を真似る必要はないということを実感し、海外の方々とは付き合ってきました。

何を言いたいかというと、皆様も大学生活の中で、これから海外の方々とは付き合うときのために、日本というものをしっかりと勉強してほしいのです。もちろん語学ができることも大切なことです。自分の意見を相手に伝えたり、相手が何を言いたいかを知るために語学は大切です。ただ、その基礎になっているのは、あなたが日本で生まれ育って、日本の文化を身につけた人間だということです。いまはすべての時間を自分のために使えます

から、自分を磨いてほしいと思います。

自信を持って、日本の文学、芸術、建築、習慣などを学んでください。あるいは自分の好きなことに真剣に打ち込むこともよいでしょう。たとえば野球で世界的に活躍している松井やイチローにしても、一生懸命努力して野球を身につけ、アメリカに渡って評価されています。デザイナーになろうと思えば、デザインをしっかりと身につけることが大切です。国際社会のなかで活動することは特別なことではなく、基礎をしっかりと身につけること、それが基本にあるということをお伝えしたいと思います。

一九九九年から三年間、中央アジアで過しました。さて、中央アジアといっても、世界のどこにあるかピンと来る人は少ないと思います。中央アジアの国に行ったことのある人もまだごく少数でしょう。まだお付き合いが浅い国々です。中央アジアの諸国はソ連の中に入っていましたので、日本ではあまり知られていません。でも中央アジアの人々は日本のことを良く知っています。中央アジアはシルクロードの真ん中にあり、東西の文化がぶつかり合い、南北の文化もぶつかり合う魅力に富んだ地域です。

中国の東側が海を隔てて日本、中国の西側が国境を接して中央アジアの国々です。カザフスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、キルギスという五つの国があります。スタンというのは国という意味です。ウズベキスタンはウズベク人の国、パキスタンはパキ人の国ということです。

この五つの国は、一九九一年にソ連が崩壊したときに独立しました。この国のことをぜひ知ってもらいたいと思います。この国に住んでいる人々はムスリム（イスラム教徒）ですが、七世紀から八世紀くらいまでは仏教が栄えていたからでしょうか、人々のものの考え方が日本人によく似ています。顔かたちや体つきが似ているだけでなく、ウズベクの人たちは、自分たちは日本人と心が似ているという言い方をします。機会があったら

ぜひ訪ねてもらいたいと思います。

一九九九年の夏、ウズベキスタンの首都タシケントの空港に降りましたとき、VIPルームにウズベキスタン政府の方や在ウズベキスタン日本大使館の方が迎えにきてくれていましたが、どの人が日本人でどの人がウズベクの人かわかりませんでした。それほど体つきや顔かたちがよく似ています。皆様もウズベキスタンに行けば、誰も日本人だと思わずに、ウズベク人だと思って話しかけてくるでしょう。

東西の文化がぶつかり合うシルクロードの真中の地域ですから、いろいろな民族が住んでいます。ウズベキスタン共和国だけでも一二〇〇―一四〇〇の民族が住んでいるといわれています。ウズベク人のグループはウズベク語を話し、タジク人が集まっているところではタジク語が聞こえる。タタール語があったり、ギリシヤ語があったり、ドイツ語だったりします。日本では日本国民というのだいたいは日本人ですが、この共和国の人々は、自分はウズベキスタン共和国国民だけれども、ギリシヤ人だ、ドイツ人だ、ウズベク人だ、ユダヤ人だということになります。一〇〇人いれば一〇〇人それぞれ違います。髪の色も違うし、目の色も違う。アレキサンダー大王がこの地に陣を張ったこともあって、中には金髪碧眼の人もいます。違う民族が一緒に住んで、お互いが争うことなく何百年も平和に暮らせるという証のような地域です。

ここで日本人は大変尊敬されています。なぜだと思いますか。それは、決して楽しい思い出ではなく、悲しい思い出ですが、第二次世界大戦後一九四五年から四六年にかけて、何十万という日本人がシベリアに抑留されました。戦争が終わればそのまま日本に戻されるはずの人々が、シベリアからソ連邦の各地に強制的に移送され、重労働をさせられました。いまでいえばインフラ整備をさせられました。ウズベキスタンだけでも二万五〇〇〇人の日本人が連れてこられて、道路をつくったり、この地域は水が大切なところで、国中に運河が張りめぐらさ

れています。その運河を掘ったり、大きな建物の建設に携わりました。生存して元気な人が日本に帰ってきたのは、一九四七～四八年になってのことです。

このときの日本人の働きぶりが——同じような心を持っていたからなおさらだと思えますが——ウズベクの人人々に大きな感銘を与え、いまでもウズベキスタン各地で、日本人は規律正しい人たちだった、真面目で真剣に仕事をする人たちだった、嘘をつかない人たちだったと語り伝えられています。ウズベキスタン各地で働かされていたとも言えますが。

車で走っていますと、「大使、これは日本人がつくった道路だよ」と教えてくれます。「この運河は日本人が掘ってくれた」とも。運河にかかる橋の上に立てば、今は水がたつぷり流れ、植えたときから六〇年近く経ちますから、岸边には大きな木が繁り、運河に沿って遠くまで畑が続いている景色を見ることが出来ます。おばあさんが、「あの運河は日本人が掘ってくれました。もっこ——藁で編んだ物を運ぶ道具です——をしょって、腰を曲げて土を運んでいた姿を覚えています」と話してくれました。

また、ベガバード市には立派なレンガ造りの水力発電所がつくられていますが、「日本人がこの水力発電所をつくってくれた」と教えてくれます。水力発電所といっても建物だけでなく、シルダリアという大きな川から水を引いて、この部屋が何十個か入るくらい大きな貯水湖をつくって水を貯め、そこから水を落として、電力を起こし、使った水はまた大きな運河で元の川に流していくという一連の大工事です。「これも日本人がつくってくれた。お陰でここは緑豊かなたくさんの方が住む大きな町になりました。この水力発電所は一日も休むことなくウズベキスタンに電力を供給してくれました」と市長さんが話してくれました。

首都タシケントにはナポイ劇場という立派な劇場があり、いまでもオペラやバレエなどが上演されています。

この建物も一九四八ごろに日本人が建設したものです。一九六六年、タシケントを大きな地震が襲い、周りの建物は全て崩壊しましたが、日本人が建てたナポイ劇場はびくともせずに残ったということで、日本人の手抜きをしない誠実な仕事ぶりが改めて評価されたそうです。

このとき働いていた人々は、ほとんどが若い人たちです。皆さんと同じくらいの年齢の人々が中心だったことが分かっていきます。日本人は収容所（ラーゲリ）に住んで、劇場を建設しました。収容所の近くに住んでいた人が、「子ども心にも収容所に住んでいる日本人はお腹を空かせているに違いないと思って、自分の家であった果物や親が焼いてくれたパンを垣根の破れたところから差し入れた。すると、二、三日経ったら、差し入れたところに手づくりの木のおもちやがお返しに置いてあった」と話してくれました。

その方は親から、「日本の人々は毎朝挨拶をして隊列を組んで、工事現場に向かい、夕方また隊列を組んで帰ってくる、規律正しい人々である。また、すぐに手づくりのものをつくってくれる、ものをつくるのが上手な人たちだ。そして何かをもらったときお返しを忘れない、とても律儀な人々だ。あなたも日本人を見習って大きくなつてほしい」と言われて育てられたんですよ、とも話してくれました。

なぜ若者だとわかるかといいますと、ウズベキスタン全体で一三カ所、小さいものを入れると一四カ所の墓地があります。こんもりした土饅頭が並ぶ墓地でした。死亡した人たちの生年月日を大使館が調査しましたら、一九二八年とか一九九年生まれの人がいました。一九四七～四八年には日本人は全て引き揚げていますから、四八年に亡くなったとしても、一九二八年生まれなら二〇歳で亡くなったことになります。若い人たちがこの地で命を落としています。戦争も終わり、日本に戻りたいとの思いで、一生懸命働いていたに違いありませんが、日本に戻ることができずに、中央アジアの地で眠っています。そうした日本の若者たちがたくさんいたこと

を、ぜひ知っていただけたらと思います。

しかもこの若者たちが、ウズベキスタンの人々に感銘を与え、日本人はすごい人たちだというイメージを作り、いまもそれがいきているというのは素晴らしいことだと思っています。すべての墓地を整備しましたので、中央アジアにいらしたときには、ちょっと足を伸ばして日本人墓地にも寄ってもらえたらと思います。ご遺族の方を見つけるのは大変でした。ソ連の中だったので訪ねていけない。亡くなってから六〇年近く経っている。ご本人が二〇歳としても、生きていればいま八〇歳ですから、親を探そうにも見つかりません。そんな状態ですので、同胞が眠っていることを思い出して、日本人墓地にも寄ってもらえたらと思います。

中央アジアに住んで、国と国の関係は、一人ひとりの人のつながりが基礎にあってできあがってきていることを実感いたしました。皆様もこれから海外でいろいろな国の人と付き合っていくことになると思いますし、将来は日本で文化フェスティバルを開きもつと多くの海外の人々に日本に集まってもらうという夢を持っています。が、そのようなときに、あなた自身が日本という国を相手の国の人に印象づけるものだとこのことを覚えておいてほしいと思います。

さらに、中央アジアに住んで、国家というものを真剣に考えることが多くありました。いまの国際社会は国と国のつながりでできている社会です。国と国のまさに際の際の関係で成り立っている世界です。それぞれの国が自分の国民を守り、自分の領土を守って、その国の中に平和な社会、安定した社会を築き、そしてほかの国と友好な関係を結んでいく。それが現在の国際社会であることを痛切に感じながら三年間過ごしました。

中央アジアの南側はアフガニスタンです。アフガニスタンでは、アルカイダやタリバーンの組織が勢力を伸ばし、二〇〇一年九月一日、アメリカで恐ろしいテロが起きました。国際的なテログループは、アフガニスタン

とパキスタンの国境近く、またアフガニスタンの山岳地帯にいまも多く存在しています。このグループは中央アジアやアラブの貧しい地域から、若者たち、中学校を卒業したばかりの若者たちを数多くお金で買い集めて、アフガニスタンに送り込みました。ウズベキスタンからも若者がたくさん連れていかれました。アルカイダの組織の中へ連れて行かれたら絶対に逃れられないとのこと。そこで何をしているかという点、イスラム原理主義の教えを教え込まれ、朝早くコーランを読み、一定の時間にお祈りをする以外は、射撃訓練や戦闘訓練など非常に厳しい訓練を受けています。この若者たちは、四〇〇〇メートルを超える山岳地帯でも戦えるほどに鍛えられて、テロを行う実行部隊として育てられています。実行部隊というのは、世界のあちらこちらで、車で突っ込むなどの自爆テロを行う部隊です。国家ではない国際テロ集団、どこの国も全くコントロールが効かないグループです。こうした国に属さないテロ集団の恐ろしさを、日本ではあまり実感していませんが、このテログループは日本を特別視しているわけではありませんから、日本も注意を払わなければと思います。

中央アジアから戻って、北朝鮮による日本人拉致問題にかかわることになりました。この問題を扱うとき、中央アジアで考えたことや経験したことが、私自身の基礎になっています。皆様は記憶におありでしょうか。一九九九年の夏に日本人鉱山技師四人が、キルギスの山中で、イスラム原理主義グループに拉致される事件が起きました。

海外で日本人が被害にあつたとき、誰が助けてくれるでしょうか。日本国が助けるしかありません。日本人が海外で被害に遭ったら、それを助けるのは日本の政府の基本的な役目です。もちろん相手の国の警察や多くの人々の協力を得て救出するということですが、そうした仕組みが現在の国際社会だということを、キルギスで起きた日本人拉致事件で日本人救出の作業を行いながら、痛感いたしました。

皆様は日本政府の発給するパスポートを持っていれば、何の心配もなく海外を旅行できます。日本政府が「このパスポートを携行している者は日本人です。無事に滞在できるように守ってください」と相手の国の政府にお願いしています。日本のパスポートは、全世界どこでも通用するすばらしいパスポートです。それは日本が日本の国民、日本の領土をしっかり守る国であり、安定した社会を作っているということが多くの国々に認められているからです。どの国も日本人を喜んで受け入れてくれます。

横田めぐみさんが拉致されたのは二九年前、皆さんがまだ生まれていないときです。拉致されたままこんなに長い時間が経っていますが、その間日本は、よその国に連れていかれた日本人を救出しようということに必死の思いではありませんでした。はっきりいえば、放置してしまいました。現在は自国民の生命や安全、財産を守ることが日本政府の基本的な役割であるとしっかり認識し、海外に連れ出され全ての自由を奪われている拉致被害者の人々を何とか日本に帰国させようと、安倍総理の下、拉致対策本部をつくり、真剣にこの問題に取り組み始めたところです。

これまで、拉致被害者のご家族が、助けて下さいと世の人々に訴えてきました。本来であれば日本政府が、日本の国が荒らされている問題として、北朝鮮に強く交渉しなければいけないかかったと思いますが、できていませんでした。

皆様にお伝えしたいと思いますのは、拉致被害者のご家族の方々と接していますと、いつも子を思う親の気持ちがいかに強いかということを感じさせられます。自分の命に代えても、自分の命を捨ててもいいから、子どもをもう一度日本に連れ戻してもらいたい。どのご家族もそういう思いでいます。ふだん、親はいろいろな言っているさいるさと思うことがあるかもしれませんが、いざあなたが困ったとき、命に代えてでも守ってくれるのは親だ

ということをしつかりと覚えておいてもらいたいと思つています。拉致された娘や息子を取り戻すためなら自分たちは命を捨ててもいいという覚悟で、いまご家族の方々が動いています。

一昨日、安倍総理は中国を訪問して温家宝総理と会談し、拉致被害者の救出に協力してほしいと発言しました。「日本では政府の中に拉致対策本部を設け、その本部長は総理自身であり、官房長官を拉致問題担当の大臣と決めた。拉致問題は日本にとって重要な案件であり、理不尽な悲惨な犯罪である。一三歳の少女を拉致して、すべての自由を奪っている。ほかにも政府が認定している人々、さらに認定できていないけれども、拉致されたと思われる人がたくさんいる。拉致問題の解決なくして北朝鮮との国交正常化はできない」と伝えました。温家宝総理は、「日本国民がこの問題に関心を示していることを理解している」とお答えになったそうです。また、中国語で書かれた北朝鮮による日本人拉致問題のパンフレットを配布して、中国の理解を得ようと努力されました。

北朝鮮の作業員たちが日本人を拉致していった現場を訪ねました。曾我ひとみさんは、佐渡の問野町で、お母さんと一緒に自宅からいつも行くお店に夕食のしたくの買物をしに行つて、どこにでもある普通の町の通りで、木のかげに引きこまれて袋に詰められ川まで運ばれました。そこから小さなボートで海に出て、沖で待つていた工作船に積みかえられたとのことです。お母さんも一緒に拉致されましたが、お母さんはどこにいるかわかりません。親子二人が一緒に拉致された事件です。めぐみさんの拉致された現場もそうですが、普通の町です。めぐみさんの場合は、学校の門を出て、バス停で三つ目くらいところで、匂いが消えてしまいました。そこから左に曲がって五〇メートルほど歩けば自分の家ですが、そこにたどり着くことなく姿を消しました。普通の道から何の証拠も残さずに連れ去るという誘拐が日本各地で起きていたのです。このような工作活動をする人たちが、日本の中にたくさん送り込まれており、日本の中にも協力者がいたであろうと考えられています。

どうして北朝鮮が日本人を拉致したかご存じですか。北朝鮮は韓国を統合しようと考えていましたし、いまでも考えています。韓国側は、当時、北朝鮮が韓国に対し激しい工作活動を行うことを嫌って、北朝鮮の人の入国を禁止したことがあります。そのとき北朝鮮が考えたことは、工作員を日本人のように仕立てあげるということでした。日本人になって偽の日本のパスポートを使えば韓国にも入れるし、世界各地に行くことができるからです。そのために、しっかりとした日本の家庭で日本のしつけを受けた、体も丈夫で責任感の強い若者が必要でした。この日本人化教育のために連れていかれたのは、皆様と同じくらいの一〇歳前後の方たちです。さらにいろいろな必要に応じて、日本から人々を拉致していったと考えられています。印刷技術が必要であれば印刷工を探して連れていくなど、必要に応じて各分野の技術者も連れていかれたであろうと考えられています。

また、北朝鮮の工作員が日本に来て、日本人になり代わるということもしました。なり代わった相手が日本にいると困るので、北朝鮮に連れていきました。宮崎の青島から原敎晁さんが拉致されましたが、原さんが乗った船には、原さんになりかわる予定の辛光洙（シン・グァンス）という工作員と一緒に乗って、原さんから生まれたところ、子どものころの友達の名前など、いろいろな情報を聞き出したそうです。原さんが北朝鮮に連れていかれたあと辛光洙は再び日本に密入国し、パスポートを取って、パスポートに自分の写真を貼り、原敎晁さんになり代わって工作活動を行いました。また、田口八重子さんが一緒に住んで日本的な習慣を教えさせられた女性も、大韓航空機の爆破というテロ活動を行いました。

拉致された方々がどういう状態にいるかは、曾我ひとみさんの家族がジャカルタで再会したときのことをお話しすると見えてくるかと思えます。

福井県小浜市の地村さんご夫妻、新潟県柏崎市の蓮池さんご夫妻、そして曾我ひとみさんの五人が、二〇〇二

年一〇月に日本に戻ってきました。でも子どもは北朝鮮に残されました。二〇〇四年五月に小泉総理が再度訪朝して、地村さんと蓮池さんの子どもたち五人は連れ戻すことができましたが、曾我さんの家族は連れ戻せませんでした。

曾我さんの夫、ジェンキンスさんに向かって、総理は一時間くらいかけて、一緒に日本に行こうと一生懸命説得されました。日本の総理がそこまで言っているのに、ジェンキンスさんはついていくと言えませんでした。なぜかといいますと、ジェンキンスさんは後にジャカルタに来て英字新聞の記者の取材に対し、「小泉総理との会談の前に北朝鮮の外務次官が三人くらい部下を連れて来て、『小泉総理と会っても日本に行くと言ってはいい。どうしても小泉総理が譲らないときには、北京までなら行くから、ひとみさんを北京に連れてきてほしいと言いなさい』という指導を受けていた。総理との会談はすべて盗聴されていた。盗聴器がついていて、自分の話すことは隣の部屋ですべて聞かれていた。会談が終わったあと、総理は飛行場に行き、自分は家に戻る。どうしても総理と離れる時間帯があるので、もし指導と違うこと、日本に行きたいと言っていたら、その日のうちに自分の命はなくなっていたらう」と答えています。

北朝鮮では、指導という単語がよく使われます。拉致被害者、捕らわれの身の人には全く自由が与えられていませんので、言いたいことを言うこともできません。指導されたこと以外のことを言ったら、あとで厳しい処罰が待っていると教え込まれています。ですからジェンキンスさんは小泉総理に対して、指導されたとおり、「自分は日本に行かない。北京までなら行く」と伝えました。

自由な発言ができないことは、分かっていましたので、再会の場所をジャカルタにしました。北京で再会という話もありましたが、北京で再開していたら、この家族は北朝鮮に連れ戻されていたことでしょう。ジャカルタ

で再会した場合でも、ジェンキンスさんは北朝鮮が拉致した人ではなく、自分からアメリカ軍を脱走して北朝鮮に入っていた人で、三九年間北朝鮮に住んでいましたから、いろいろな情報を持っている可能性もあって、北朝鮮はジェンキンスさんを日本に渡すつもりはありませんでした。

チャーター便を用意してもらって、平壤でジェンキンスさんと美花さん、ブリンダさんというお嬢さん二人をチャーター便に乗せました。当然のこのように、北朝鮮の指導員三人も乗ってきました。決して自由を与えないよう、それぞれ一人ずつ指導員がついて監視しています。ジャカルタでは、ジェンキンスさん、美花さん、ブリンダさん、そしてその後ろを日本人が囲んでタラップを降りてきました。タラップの下ではひとみさんが迎えました。日本のチャーター機ですし、タラップの下ではカメラが回っていましたので、一緒に乗ってきた北朝鮮工作員は一緒にタラップを降りませんでした。まだ飛行機の中に残っていました。機のそばには日本人だけが乗ったバスをつけてありましたので、曾我ひとみさんと家族三人をこのバスに乗せてドアを閉めました。

バスのドアを閉めたときに、曾我さん一家を北朝鮮の人々から物理的に切り離すことができた瞬間です。北朝鮮の人がいない、日本人だけのバスの中に家族を入れることができました。ホテルに連れていき、ホテルの一角に押し込んでしまいました。北朝鮮の人から指導が入ると、ジェンキンスさんは自由な発言ができないことはわかっていましたので、部屋の電話もはずしました。北朝鮮からついてきた人も当然のこととして同じホテルに泊まっていましたから、内線で指導されることもあると思って、電話器をはずしました。北朝鮮の人が会いたいの言ってきたても、会わせませんでした。家族四人だけで、誰も邪魔せず、盗聴もない、自由に相談できる環境をつくりました。

ジェンキンスさんには北朝鮮の指導員に毎日連絡するようという指導が入っていたようで、夕方になると背

広に着替えて出かけようとするのですが、日本の政府関係者が廊下で通せんぼをして出ませんでした。そのようにして、北朝鮮の人の指導を絶ちました。そうしましたら、数日経って、ジェンキンスさんから家族揃って日本に行きたいと伝えてきました。そうでもしなかったら、自由にも言うこともできない状況にこの一家は置かれていました。日本に行きたいということがはっきりしましたので、一刻も早く帰国させたほうがいいと思います。まして、すぐ総理にご相談するため日本に戻り、日本に連れてくる手配をしました。お陰様で、この一家はいま佐渡で生活しています。

その時の状況から、いくつかのことが見えてきます。北朝鮮は拉致していった被害者に対して、厳しい監視をしている。連れて行かれた人たちは、自分が北朝鮮にいることを親に知らせることすらできない、自由な発言は一切できずに、ひっそりと生き延びている様子が分かります。

また、拉致実行犯である工作員たち、例えば辛光洙は英雄として扱われていますので、英雄が連れてきた日本人を監視している人たちに重い責任が課されていることが見えてきました。ジャカルタでジェンキンスさん一家に接触できなくなつたとき、北朝鮮からついでにきた指導員たちは日本を非難して、大きな声でののしりました。北朝鮮から遣わされた監視者たちは、平壤に戻つたとき、処分されないように、自分たちは一生懸命やっている。と平壤に知らせていたのだらう、と現場の担当者たちは考えていました。

監視者に課されている責任が重いことを考えれば、拉致被害者のほとんどは生存しているに違いないと考えられます。全ての自由を奪われたまま、厳しい監視の下で、いろいろな仕事をされられているに違いないと考えています。

現在、安倍内閣は、政府一体となってこの問題に取り組む体制ができました。北朝鮮による拉致問題に本気で

取り組んでいます。厳しい監視下に置かれ、所在すらつかめていない被害者をどのように救出できるのか、非常に難しい問題ですが、日本人が海外で被害に遭ったら、日本人を救出するのは日本の国しかありません。日本人の国民の生命、安全、財産を守るのは日本政府の基本的な役割です。自国の国民や領土を守り、安定した社会を維持してはじめて、国際社会での信頼を得ることができます。北朝鮮による日本人拉致問題は、他人事ではない、日本の国の問題なのだとこのことをぜひご理解いただき、関心を持っていただきますと思います。日本人が強い関心を持つていますが、北朝鮮に対して最も強いメッセージになります。これからも関心を持ち続けて下さいますようお願い申し上げます。

長い間ご清聴くださいました、ありがとうございます。亜細亜大学のますますの発展をお祈りしますとともに、皆様卒業まで存分に勉強し、遊び、自分の好きなことを伸ばしてほしいと思っています。また、社会に出ても、皆様が充実した幸せな人生を送れますよう心からお祈りしています。ありがとうございます。